



「第二次日本経穴委員会」便り

～第24回 TFTミーティング in KOREA～

第二次日本経穴委員会副委員長 しのはらしょうじ
篠原昭二

はじめに

6月27日(火)～29日(木)の3日間、第3回TFTミーティング(タスクフォース会議)が韓国・大田(テジョン)のKIOM(国立韓医学研究所)において開催された。本年3月に東京で開催された第6回非公式会議において、全穴の経穴部位の標準化作業は完了する運びとなった。しかし、合意形成は中国語で行われたこと、中国語表記の中にも一部矛盾点があったこと、中国語から英語への翻訳作業が必要であったこと等、種々の未解決の問題があったことから、急遽、タスクフォース会議を各国から2人の代表を出して行われることとなったものである。

参加者

参加者は、WPRO(WHO西太平洋事務局)の崔博士、中国からおなじみの黄龍祥教授(Huan Longxiang)、そして、若手の譚源生先生(Tan Yuansheng)、韓国からはやはりおなじみの金教授(Kim Young-Suk)、貝先生(Koo Sung-Tae)が参加した。日本側からは、形井秀一教授と筆者(篠原昭二教授)が参加した。また、日本語通訳として朴先生(Park Song Ki)、中国語通訳として金先生(Kim Kun)が参加し、KIOMメンバーの細やかなサポートとともに会議は開始さ

れた。

部位表記の統一作業

最初に行われた作業は、英語表記の際の最初に記述される部位: regionをどうするかという議題であった。世界標準を作る場合には、それなりの統一された表記法に従って作成する必要があり、単純に取穴部位が決まればよいというものではない。したがって、当該経穴が人体のどの解剖学的な部位にあるのかをまず明確にし、その上で、縦のライン、横のラインの順に規定しようと提案された(一部の経穴では縦と横が逆転する)。そして、その部位区分は、最新の解剖学的な文献(IAT; International Anatomical Terminology)を参考にしようということになった。

急遽合意された取り決めであり、その資料を早急に作る必要があった。そこで、1日目の会議終了後全員がホテルの一室に缶詰になり、午後8時15分から11時までの間、作業を行って頭の前から足の先に至る部位区分案を完成させた。

韓国側提案による中国語表記の確認

会議2日目、前日深夜に及ぶ会議の結果について報告し、部位区分について再度確認した。

次に、中国語表記に関する経穴部位の確認作

業を行うこととなったが、韓国側が確認したものの、中国側が確認したものの、さらに日本側の確認したものをすりあわせる必要がある。そこで、最初に韓国がこれまでの非公式会議の結論として提示された中国語表記に関する問題点について検討することとなった。一穴一穴経穴部位に関する中国語表記について確認する作業であり、長時間を要することとなった。途中の休憩も挟みながら、2日目の最終の時間に膀胱経までの経穴についての検討が終了した。その後、案の定、残りの経穴については宿題となり、前日に引き続いて夕食後全員が一室に缶詰となつての検討作業を行い、約2時間を掛けて作業を終了した。WHOの会議のハードさは今回に始まったことではないが、何回も顔を合わせ、気心が知れたメンバー同士であるからこそその成果であると思われた。

中国側提案による確認作業

会議3日目の午前中は、都合により今後の活動プランについての検討作業が行われた。この問題については、別途報告をする予定であり、割愛する。その後、いよいよ中国側が提案した最終的な経穴部位表記の確認作業となった。3月の東京で行われた非公式会議の際、決定された中国語草案に必ずしも一貫性がないことが明らかになり、中国側に再検討を依頼して、その内容に関するチェックを行うのが主旨である。具体的には中国語表現の適・不適を中国側が検討したものであることから、ほとんどの記述は提案通り承認されるはずである。

一方、中国側の検討の際により適切な表現というよりも、新たに説明文を追加した箇所も何か所もあり、正式な非公式会議に諮ることなくTFT会議で修正することは適切でないのではな

いかといった意見が出され、しばしば紛糾することとなった。

また、各国間でエクセルファイルをやりとりするうちに、経穴名の文字化けの見られる場所も見つかり、ファイル交換の脆弱性を再認識させられる場面もあった。

3回目の正直?

斯くして、6回の非公式諮問会議と3回のタスクフォース会議を通して、日本側では奇穴扱いであった眉衝、風市、急脈、中樞といった経穴が正穴に組み込まれたこと、さらに、全経穴について経穴部位の日、中、韓三カ国の合意形成が中国語草案として完成を見た。今後は、中国語草案の再チェック、中国語から英語草案の作成と確認、さらには三カ国でのすりあわせ作業が行われる予定であり、その上で、本年10月31日から11月2日にかけてつくば市で開催される世界標準化会議において、経穴部位に関するグローバルスタンダードが承認される見通しである。

結びにかえて

今回、経穴部位の標準化作業に参加して種々の検討を行う過程で、多くの研究者と話し合う機会が持てたことは大きな成果であった。一人日本国内だけでなく、今や世界に通用する鍼灸医学を確立することが重要な責務であることを痛感させられた。今後、経穴部位の標準化作業を皮切りとして、鍼の規格や、診断、治療法、最終的にはエビデンスの確立に向けた三カ国の協力体制の進展が心から望まれる。作業は、まだまだ緒についたばかりであるが、完成を目指して一層の努力を傾けたい。